

多文化共生と心理臨床

④性別と「らしさ」について

ガヴィニオ 重利子

3月8日は国際女性デー。

男女平等とか、女性への機会均等とか、色々と叫ばれて久しいけれど。実際にそのような理念や考え方が生活に浸透していくのにはものすごく長い時間が必要なのだろうと感じる。

わが家の息子達は皆、幼い頃から保育園に通っている。上の子ども達は日本でその時期を過ごしたが、末っ子は生まれてすぐに欧州に渡ってきたため、保育園も現地で通い始めた。給食の影響か、食べ物の好みも違って「何が食べたい？」ときかされると、「お寿司！」とか「うどん！」と兄達が盛り上がる中、彼だけは「パスタ〜！」と譲らない。食べ物の好みも、三つ子の魂の一つなんだな〜と興味深い。

そんな末っ子が“アナと雪の女王”にハマった。園で仮装をしている子がいたり、主題歌を歌っているお友達がいたりして感化されたようだった。おもちゃ屋さんでドレス姿のキャラクター人形を見つけて「ほしい」と抱きしめ、ねだり出した息子に、いつときの流行りでそう言っているのだろうと「クリスマスまで待とうね」という約束にした。しかし結局彼の思いが消えることはなく、淡いブルーのドレスを着た金髪のエルザ姫が今も、彼の一番のお気に入りとしてお昼寝のお供を務めている。

そう言えば、これまで一度もお姫様の人形といった「女の子用のおもちゃ」を息子達からねだられたことがなかったことにふと気づいた。その後も末っ子は、アナ雪のグッズを見ると欲しがり、仮装（着用）のドレスも欲しいと言い出した。さすがにどこに着ていけるかなと考えてしまった私は、少しスパンコールのついたアナ雪パジャマを買ってあげることにした。これもまた大のお気に入り、同じく大好きな自動車柄やヒーロー系のものと交代で毎日愛用している。

そんな中、先日保育園で粗相をしてしまった息子。洗濯物の袋を開きながら代わりの下着を園に置いていなかったことを思い出し、「今、何を履いてるの？」と息子に尋ねると「これ！」と自慢げに見せてくれた下着は、ピンクのキティーちゃん柄だった。息子はキティーちゃんというキャラクターはおそらく知らないのですが、先生がそこにあった貸出用をあてがってくださったのだらうと思うが。日本だったら男の子にコレを着さすことにはきっと抵抗（後で親から文句が出るのではないかといった心配も含め）があったのではないだらうかと想像するほど、大変可愛らしい柄だった。その時 にふと、そういう環境だからこそ息子はアナ雪が好き！と思えるようになったのかもしれないと考えさせられた。

この出来事は、「男の子は、女の子は、こうあるべき」という感覚が実は自分にもあったのだということに改めて気づかせてくれた。「男の子なんだから泣くな」とか「女の子なんだから優しく」などといった露骨な性差別を子どもに向けて放つ大人は、私自身も含め日本でも減ってきているようには思う（あるいはそう望む）のだけれど。実際にはやはり、大人の側にそれぞれの性に対して期待していることや勝手に思い描いている「らしさ」が確実に存在することを自身の中に痛感した。

こういうことは、意識的に慎むことのなかなか難しい「感覚」であって、そうではない感覚（男児に普通にキティーちゃんのパンティーをあてがう先生）と出逢うことによって初めて気づかされるものなのかもしれない。

そんな欧州でも日本と変わらないのが子ども服売り場。洋服の仕様は男女ではっきりと分かれていることに気づかされる。その傾向を大雑把に言えば、女の子用は男子用に比べて体にぴったり沿うようなデザインが多く、体の曲線を強調するようなカットのものが多いうように思う。男の子用はどちらかというとダボっとしていて、種類も少ない。

このような差により、女性は幼い頃から「体の曲線」を意識させられているのかもしれないし、男性は「洋服（見かけ）なんて興味を持つな」と教えられているのかもしれない。そして、そういったことの延長線上に例えば日本では、パンツよりもスカート姿が求められる女性の就活（リクルートスーツ）があったり、汚女は非難されても汚男という言葉は生まれることなくスルーされたりという事態が起こるのかもしれない。

ちょっと飛躍するようだけれど、それが最終的には身なりや家を整える家事には女性の方が向いていて、男性にとって家事は育メンと呼ばれるようなスーパーヒー

ローにしかなし得ない特殊技能となってしまうこともまた、あるのではないだろうか。

少子化などとも合わせて話題にされる「働く女性」についても、法的整備や保育園増設といった環境整備もさることながら、そもそも根っこにある「男性が生計の主を担わなければならない」「女性は育児を担当した上で働くべき」という価値観自体が見直されていくことも、とても大切な気がしている。

何が男性らしさであり、女性らしさなのか。その定義自体がその社会に生きる人たちの価値観の集合体であり、それらが変化していくには、そこに暮らす私たち一人一人が自身の持つ価値観への気づきを得て思考していくことが不可欠なのだろう。たとえそれに長い時間がかかったとしても。

女性について考えるということは同時に、男性について考えるということでもある。国際女性デーが男女ともに「らしさ」について今一度考えることのできる日として、日本でも話題に上がってくれるといいなと思う。